

Michael Wieler: Dilettantismus

— Wesen und Geschichte. Am Beispiel von Heinrich und Thomas Mann

池田 晋也

ヨーロッパ世紀転換期の文学研究において、ディレッタントやディレッタンティズムといった術語は志操や風潮を説明するのに非常に便利な、ある意味呪文のようなものとも言える。しかし安直に用いれば、ある現象を一時的に処理し、表面をなぞっただけで実は何も説明していない、という危険に陥る可能性もある。例えば「…の作品における芸術家像（あるいはディレッタント像）」といった研究には、登場人物を単にタイプ分けしただけでそれ以上の展開がないものがしばしば散見される。この言葉は一義的に捉えることのできない非常に多くの相反する顔を持っており、使用するには哲学用語を扱うような繊細さが要求されるのであるが、研究者のあいだにこの言葉に対する一定の共通認識があるとは言えず、学術用語として使えるかどうかすら怪しい。文学テキストに見られる用法をすべて把握することは恐らく専門家でも不可能なのではなかろうか。そうした厄介な研究に正面から取り組んでいるのがヴィーラーの研究書『ディレッタンティズム』である。副題にもあるとおりこの本は二部構成になっており、後半においてはマン兄弟の初期の著作に見られるディレッタンティズムの分析がテーマとなっているわけだが、ディレッタンティズムについてなにがしかの包括的な知識を得たいと思う者にとって注目すべきはヨーロッパ文学におけるディレッタンティズムを総括した第一部であろう。個別の作家の分析に入る前提としてディレッタント及びディレッタンティズムという術語を学術的に「使える」ものにするために 120 頁もの分量が充てられていることから、この言葉を取り扱う難しさを窺い知ることができる。以下においておおまかにその流れを追ってみよう。

第一章では、まず主だった知識人及び研究者たちによるディレッタンティズムの定義と問題点が比較される。シラー、ゲーテ、モーリッツ、グリルパルツァー、アミエル、プーランジェ、ニーチェ、ホフマンスタール等の言説から浮かび上がってくるディレッタントの特性は実に多面的である。ヴィーラーはそれらを一義的なイメージへと統合することを放棄し、その代わりにそれらの、例えば詐欺師性、芸術家気取り、極度の感受性、行為に対する消極性、決断力の欠如、官能的なものへの逃避癖といったものの背後に、共通の動機を見ようとする。それは、啓蒙によって失われた紐帯を取り戻そうとする欲求である。シラーの言葉を借りた、「ディレッタンティズムとは、わき道や墮落の道を辿りつつ完全な人間に憧れ、それを探求することである (Dilettantismus ist die *Sehnsucht nach dem 'ganzen Menschen' auf Um- und Abwegen*).」

(21 頁) というのがこの研究全体を貫くヴィーラーのテーゼである。これによって 18 世紀末から 19 世紀轉換期までのディレッタンティズムはそれぞれ特殊なものをもっていたとしても基本的に同質のものとして、半ば近代人の運命として捉えることが可能になる。「ディレッタンティズムにとって重要なのは、近代やポスト啓蒙の、さらには (...) ポストモダンの人間の本質をなす素質なのである。それは術語として固定することによってではなく、むしろ根底に潜む諸傾向の分析によって正しく評価されるものなのである。」(15 頁) 続いて 19 世紀轉換期になってディレッタンティズムの諸特質が、デカダンス、耽美主義、ダンディズム、キッチュなど他の概念のものと抵触し、混ざり合うようになったことが述べられる。特にデカダンス、ダンディズムとはもはやはっきりと区別され得ないほど重なり合い、パールやカスナーなどその時代の人間自身が混同している例が挙げられている。先人達による無節操な濫用が、この言葉を一義的に定義することを不可能にしてしまったのである。

第二章では、まず先に触れたヴィーラー自身のテーゼの裏付けがなされる。ディレッタンティズムの背景としてまず挙げられるのが啓蒙と観念論である。理性は旧来の価値を批判し破壊した一方でそれに代わる価値を作り出せないでいる、という失望とディレンマによって、再び不合理ではあるが生を満たしてくれるものへと向かう契機が人間のなかに生じる。しかしその可能性も — すでに根付いてしまった批判精神によって — 結局は閉ざされてしまう。ディレッタントの傾向を持つ人間は、自己の生を本質的に規定することができない限り、挫折、失望、完全なものへの覚醒を繰り返し味わうことになる。次にプーレンジェがディレッタンティズムの原因と見た三つの要素、つまり教育、環境、理論は、著者がディレッタントの一人と見るティークの場合には芸術とのつながりを促進するものとなる。美はそれ自体自立し完結したものである、という確証のないテーゼによって、芸術はディレッタントにとって完全な人間を目指すための手本となるのである。しかし、ヴァッケンローダーの小説『芸術を愛する一修道僧の真情の吐露』中の人物ヨーゼフ・ベルクリンガーが示しているように、芸術家であってもディレッタントの陥る失望を味わう危険に絶えずさらされている。芸術は精神治療の手段である一方、ディレッタンティズムと芸術との結合は、ディレッタント的な人間を現実からより遠ざけ、彼の存在的な拠り所の無さをより決定的なものにしてしまう。ディレッタントは素材に引き返すことも出来なければ、新たな第二の素材に身を委ねることもできない。ディレッタントとして漠然とした何物かを追い求め続けることは当然疲労をもたらす。より現実的な最終手段として、カトリシズムへの回帰と社会主義なドイデオロギー的な運動への参加が挙げられる。これは個人主義から社会参加への転換であると言えるが、しかしこれもまた実在するはずのないユートピア的な世界への逃避であるとも言える。逆に、奇蹟をただ待ち続けることによって外界との接点を失うことや、厳しい自己省察による自己否定や極端なエゴイズム、自己顕示もディレッタントの傾向の一つと見なされる。また目標とするものが自己や外界に見出せない場合、ディレッタントは他者との共感

(Anempfindung) に可能性を見出す。それはニーチェが『反時代的考察』の第二考察「生に対する歴史の利害」において示した過去に対する — 未来を志向する限り過去を模範とし、現在に對置することは有効である — という姿勢や、ボードレーが詩人の天分として示した、他者の視線で見る才能と親近性を持つ。だが詩人が自らの生と味わった他者の生を区別できる一方で、ディレッタントにはその能力が欠けている。これは、ゲーテやシラーのディレッタンティズム批判のポイントである、芸術と現実の生とを混同することの危険と比較される。そのような例として、ジャン・パウルの小説『巨人』が、またその象徴として、神話の人物プロテウスが挙げられる。この共感能力は、より良い自己のあり方を探求するための現実的な手段という機能を持つと同時に、変り身の早さ、意志薄弱、現実逃避というネガティブな側面を持つ。またディレッタントは旅人にもなぞらえられる。この場合、旅人であるディレッタントは土着の人間、すなわち狭い空間に縛り付けられてはいるが、欠乏を知らずにすべてを肯定して生きる人間を、優越感と羨望の入り混じった目で見ることになる。最後に、完全なものを探求することによって絶えず挫折が運命づけられているディレッタントの不感症とアブノーマルな刺激の追求について、ユイスマンスを例に語られる。

第三章ではシラーのディレッタンティズム論とロマン派の親近性について論じられる。ヴィーラーによれば、未だ誰も言及していないそうだが、シラーの『素朴文学と感傷文学』こそが 19 世紀転換期にまで及ぶディレッタンティズムの問題を先駆的に、そして正確に捉えた論文であった。ヴィーラーはシラーがそこでディレッタントを感傷的なものの端的な形態として示していることに注意を向けさせる。つまりシラーが近代人を自然の調和を取り戻すことにおいて挫折が運命づけられている感傷的な人間と見るとき、彼は同時にディレッタントの本質も見抜いていたのである。そして、ロマン派は無限を志向することにおいてディレッタントを生む温床であり、それがシラーのみならずアミエル、ホフマンスタールとも非常に近いものであることが述べられ、文学史においてディレッタンティズム研究が大きな射程を持った新たな視点を切り開く可能性を持っていることが示される。

最後の第四章は、ハムレット、ドンファン、ドンキホーテ、ファウストという文学的人物像が、文学テキストにおいてディレッタントを表現するライトモチーフとして使用されてきたことを例証する章である。これら 4 人の特性や運命が、ヴィーラー自身が掲げたテーゼをさまざまなレベルで体現していることは言うまでもない。

*

膨大な文献を読みこなし、整理したヴィーラーの論文は、ディレッタンティズムの文学的見取り図として今後われわれの研究の大きな指標となっていくであろう。ただ、彼は 18 世紀から 19 世紀転換期にかけてのディレッタンティズムを精神的に同根のものとすることによって、またヨーロッパに普遍的な現象と見ることによって、様々な時代背景のもとに成立したテキストをこ

の論文内でいわば無条件で並列し比較することを可能にしたのであるが、結果的に個々の事例の特殊性を検討することが放棄されてしまっている。また、多くの知識人たちが証人として登場しているかに見えて、実際には引用が数人のドイツ語圏とフランスの作家、批評家に偏っていて、ディレッタンティズムをヨーロッパ全体の現象として考察するには少し不十分のように思われる。さらに、シラーから出発し、絶えず彼の問題の枠内に止まることで、著者は自分のテーマを様々な文献を通して繰り返し裏付けることに熱心になり過ぎて、結果として全体的に論文が単調平板なものになってしまったように思われる。ディレッタントが生まれる背景に啓蒙を見ることに全く異論はないが、精神的な側面は啓蒙のプロセスの一部分に過ぎないのであって、政治的、経済的な社会構造の変化、さらには科学的な発明が人間に与える影響も看過できないのではないだろうか。ピーター・ゲイの『快楽戦争』(1998)や『シュニッツラーの世紀』(2001)のように、文学的表象を分類するにとどまらず経済学的データまで幅広い情報を駆使して時代の傾向を精緻に描く方向性がこの論文に備わっていれば、ディレッタンティズムの文化史的な奥行きを広さを実感させるようなものになっていたのではないかと。

(Würzburg: Königshausen & Neumann 1996)

Ekkehard W. Haring: Auf dieses Messers Schneide leben wir... — Das Spätwerk Franz Kafkas im Kontext jüdischen Schreibens

佐々木 茂 人

改めて言う必要はないだろうが、いまやカフカ研究は見通しがつかないほど多様化し、またそれぞれの研究領域は独立した流れを形成するほど深化している。カフカ・ユダヤ研究も例にもれず、初期の神学的解釈から、伝記的解釈、受容研究、文化史のアプローチを経て、現在ではジェンダー研究などが応用されるに至っている。これらの研究が残してきた膨大な解釈の蓄積は、さながら旧約聖書(モーゼ五書)に加えられたおびただしい解釈および注釈の総体としてのタルムードを想起させる。従来の研究に新たな解釈を付け加えようとする者は、タルムード学者よろしく、それまでの議論を参考にしつつ、また、相対立している見解と奮闘しながら、自らの解釈を捻り出さなければならない。著者ハーリングも、そうした意味ではカフカ研究史の批判的継承を目ざすタルムード学者の一人であるといえよう。

ハーリングは一貫してカフカを論じてきた。修士論文はカフカ後期の短編『ある犬の研究』を扱い(1995年刊)、その後は『ユダヤのこだま』誌〔*Das Jüdische Echo*〕を発表媒体にして日